

「螺旋のエンペロイダー Spin3.」誤植のお詫びと訂正

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

2015年12月10日発売となりました「螺旋のエンペロイダー Spin3.」の275ページにおいて、制作工程上の問題から誤植（文章の重複、抜け落ち）が発生したことが判明いたしました。

【誤】

- ・275ページ1行目の本文が、274ページ17行目（最終行）の本文と重複している。
- ・275ページ17行目から278ページにまたがって入るはずの本文

真っ白い顔をした咲桜が、虚宇介の肩を後ろからぐいっ、と掴んだ。そして——引っぱり込んだ。

の一部が抜け落ちている。

謹んでお詫びさせていただきますとともに、正しいページのPDFファイルを配布させていただきます。

関係者各位、並びに読者の皆様にご迷惑をお掛け致しましたことを、ここに訂正するとともに深くお詫び申し上げます。

2015年12月15日
株式会社 KADOKAWA
電撃文庫編集部

空間の中から、ぬうつ、と白いものが浮かび上がるようにして現れた。洞窟どうくつから外に出てくる様子に似ていた。

その白いもの——それを迅八郎は知っていた。

だが、信じられなかった。

「え——」

彼はこれほどの動乱の中にあつてさえ、それ以外のすべてのことを一瞬、忘れた。そんな馬鹿ばかな、と思った。その白いものは——人ひとだった。才牙虚宇介が創つたはずの影から、まったくの別人が顔を出した。

「……………」

その人物——少女の顔色は真つ白だった。そこは迅八郎の記憶とは異なっていた。しかし知つている。見間違ひようがない。その少女と迅八郎は、ついこの前まで同じクラスで席を並べて共に学んで、競い合つていた相手だったからだ。

「……志邑咲桜……？」

だが、そんなまさか——彼女は既に死んでいるはずだ。少なくとも彼はそう確信していた。しかし今、それが目の前にいる——。

「——」

真つ白い顔をした咲桜が、虚宇介の肩を後ろからぐいつ、と掴つかんだ。そして——引つ張り込